

Question : 東日本大震災におけるバイオマスタウン構想自治体の被災状況は？

Answer 東日本大震災による主な被災県：青森・岩手・宮城・福島・茨城・千葉の6県のバイオマスタウン自治体合計数48の30%強に当たる沿岸部16自治体が甚大な被災地域となり、残る70%弱の内陸部自治体の被災は軽微となりました。「景観文化」編集班調査によるWeb等での被災概要は以下の通りです。各自治体の被災項目・表現は不統一ですが、そのまま要約して表記しました。また、刻々と更新される人的被害はあえて不掲載としました。

青森県

六ヶ所村：漁船流出、沈没。道路・宅地地盤沈下、陥没
三沢市：漁港でタンクが倒壊し重油流出、床上浸水
八戸市：全・半壊約650棟、広範囲で浸水、船舶・漁具破損流出

岩手県

釜石市：市街地は冠水、沿岸部は壊滅。全・半壊3,800戸以上
遠野市：全・半壊30戸以上
花巻市：一部破損等300戸以上

宮城県

大崎市：道路破損、全・半壊・一部破損4,100戸以上、公共施設31棟
大郷町：道路破損、半壊・一部破損310戸以上

福島県

南相馬市：1800世帯以上壊滅、一部が原発避難指示圏内
富岡市：全域が原発避難指示圏内、町機能は郡山市へ移転

茨城県

牛久市：家屋被害630件、道路・崖・地割れ等170件
日立市：全・半壊・一部破損900戸、床上浸水480戸以上、道路被災約300カ所
稲敷市：全壊・半壊600棟、一部損壊30棟、道路305カ所、橋梁5、崖崩れ6、水田液状化

千葉県

旭市：全・半壊約1,100棟、一部損壊2,100棟、道路破損等
山武市：全壊・半壊125戸、床浸水400戸以上、塩害耕作地・水田335ha
香取市：液状化全壊・半壊・一部損壊約3,500棟、液状化水田等約3,500ha、道路被災約500カ所

この度の震災・津波でこれまでの拡大文明からの転換や新たな国土づくりが不可欠となりました。そこでクローズアップされているのが「バイオマスタウン」です。「バイオマスタウン」を視点とした国づくり・街づくりは、崩壊した自然と人間のバランスを再構築し、列島のゴミ削減に加えて、再生エネルギーへの転換・CO₂削減、雇用を創出し、都市のコンパクト化への期待を図るものであると考えられるからではないでしょうか。

事務局だより

3.11の時、事務局内のファイルキャビネットの引出しが全部飛び出し、ホワイトボードの壁掛けフックが片方外れました。私自身も避難する際に階段を踏み外して膝を捻挫してしまいました。その後は常に引出しの鍵をかけ、昼間は天井照明を消したりして、安全と省エネに努めています。この震災とは関係ありませんが、事務局のパソコンが完全に故障してしまって現在修理に出しているのですが、メールの送受信ができないので孤立した感じになっています。またこの原稿を書くこともその他の仕事もできないため、とても不自由です。このような状況になってみると、今やパソコンというものが日常の生活の中に如何に大きく幅を利かせているのかが改めて痛感させられ、今後の停電対策も考えなければならないと思っています。事務局長：八木健一



編集後記

今回の編集は、本編のニュース欄に新しく発足した「TDAサロン」の報告がありますが、何よりも「景観コラム」欄の＜東日本大震災に思う＞の編集に大わらわでした。多くの投稿にこの場をかりて暑くお礼を申し上げます。文字数や写真カットがなかなか守って頂けないのは相変わらずです。まだまだ多くの提言もあると思います。限られた予算の問題もあると思いますが、この企画は今後も継続すべく検討中です。



2011-06-01

目次

- ☐表紙

災害を忘れさせる構造（絵・文）
／小澤 尚
- ☐見開き

TDA NEWS
TDA サロンー第1回～第6回概要ー
／高橋 徹
- ☐見開き

海外ランドスケープ事情
「歴史が重層し、地形がうねるシチリアの景色」
／横川 昇二
- ☐裏表紙

景観文化Q & A「バイオマスタウン」
／内山 興亞
- ☐裏表紙

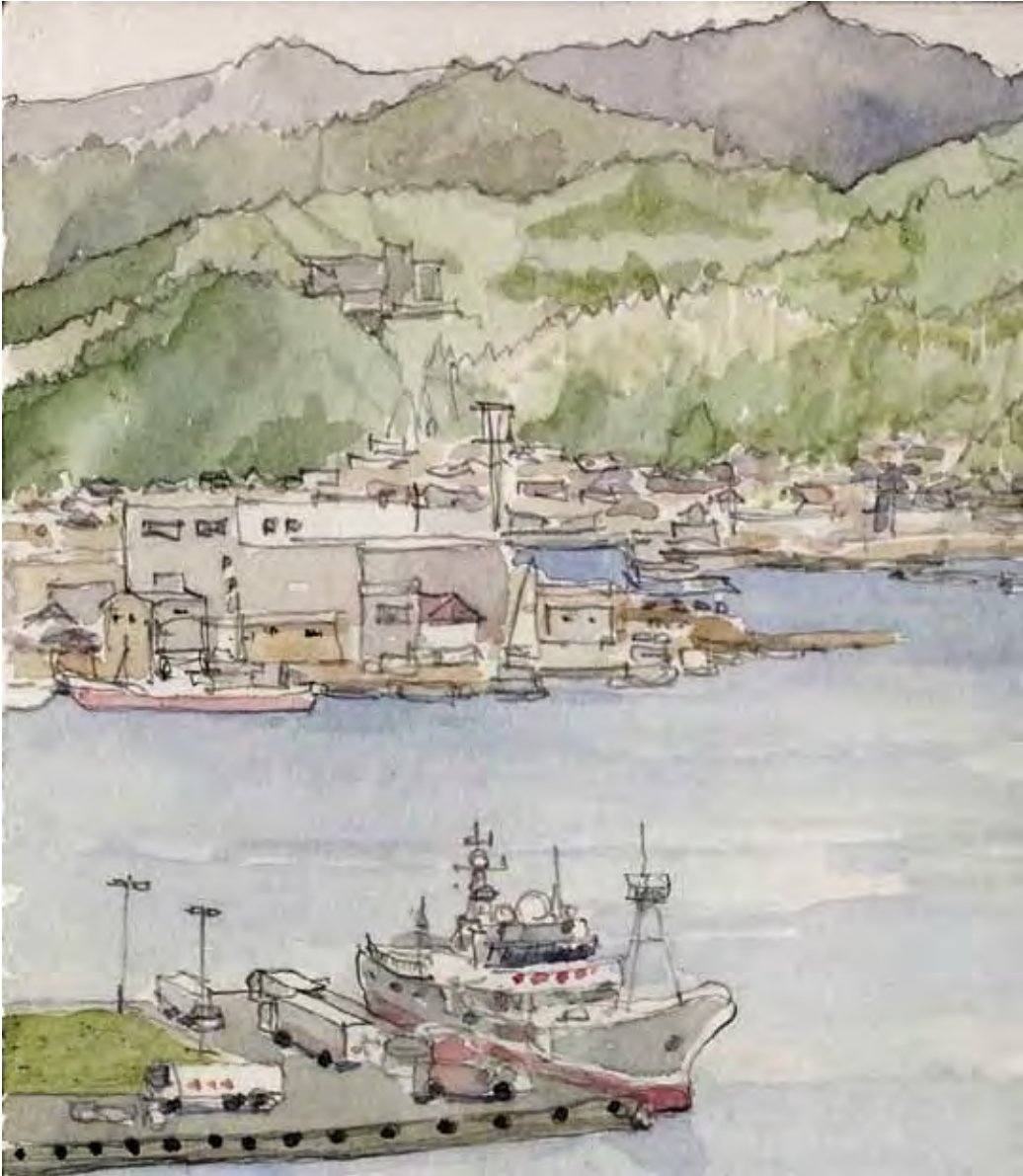
事務局だより／八木 健一
- ☐裏表紙

景観ビジネス最前線
／(株)住軽日軽エンジニアリング
- ☐別冊

景観コラム「東日本大震災に思う」

景観文化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう <http://www.tda-j.or.jp>



災害を忘れさせる構造

かつて祖父母は、船大工から網元を経営していたが、家は海に面した高台の小学校裏にあった。子供の頃、渚に降りる時は、いつも高波に気をつけるように言われた。その白い渚は、やがて黒くなりテトラポットやコンクリートの港や貨物船や自動車に占められ、ボート遊びした湾も埋め立てられ建物も造られ悔しい思いをした。この絵は、宮城に赴任2年目、1998年の高台からの気仙沼の姿だが、子供の頃感じていた悲しみや無念を含めて描いた。スケッチで大事なことは地形や原型だが、現実の姿は、水辺を遠ざけ、つまらなく、危険を忘れさせる構造物が支配し惑わせる。一方こうした姿に対し、環境の再生を願った前回 Vol.12 の絵、日本橋川地下の都市基盤構想図には、空や水辺等の再生とともに地震、津波、被爆、ライフライン、流通、備蓄等の対処の意図もある。

TDA 正会員 小澤 尚

TDA NEWS

TDA サロン

ー第1回～第6回概要ー

TDAサロンは、昨秋、事務局スペースを拡張したのをきっかけに、会員等に積極的に利用して頂き、交流促進の方策の一つとして発足しました。今回は第1回から第6回までを紹介します。いずれも個性あふれる講師を中心に本音トークが行われました。月2回位のペースで毎回、ゲストを囲んで気楽に、軽い飲食とともに語り合う場です。会員に限らず多くの方の参加をお待ちしています。開催日は原則、毎月第2、第4木曜日の18:30よりですが、ホームページに予告のうえ、メールでも事前案内をいたしますので確認の上、ご参加ください。

(サロン委員長 高橋 徹)



海外ランドスケープ事情



1 カトマンズの都市問題

ゲスト：渡辺治郎氏

元 JICA シニアボランティア
2010 年 12 月 2 日

渡辺さんは日本工業立地センター、日本工営を経て、2008年より2年間、JICAシニアボランティアとして、かつて仕事で関わったネパールの首都、カトマンズの都市計画、特に「廃棄物管理」（ごみ処理）支援の専門家として派遣された。

カトマンズは世界遺産でもある古都。しかし、現実には都市インフラがないまま、地方からの人口集中に喘ぎ、人間の生活都市に成れないでいる「フン塵都市」でもある。エリートである政府役人から市井の人々との付き合い、お金が掛からず、誰にもできる「生ごみコンポスト（肥料）づくり運動」の提案、何処にでも入り込める氏ならではの明るい性格を生かしての奮戦記であった。



2 建築への姿勢と菊竹建築

ゲスト：遠藤勝勲氏

遠藤勝勲建築設計室
2011 年 1 月 27 日

建築の設計活動のほとんどを菊竹清訓事務

所で過ごした遠藤勝勲さんの建築を愛する姿勢を伺った。多くのスター建築家を輩出した背景には遠藤さんの存在が大きかったのではあるまいか。建築を宙に浮かし海に広げることを発想し続けた菊竹さんとそれを支えた遠藤さんの裏話には抱腹爆絶倒するものがありました。

- ・学生時代の菊竹さんとの出会い
- ・就職後の貧乏事務所生活
- ・スカイハウス設計あれこれ
- ・ブリジストン会社の一連の建築
- ・都城市民会館
- ・江戸東京博物館 その他



3 観光交流空間

ゲスト：森一朗氏

デザインの森 代表
2011 年 2 月 10 日

日本設計を退職後、「デザインの森」を設立し、ホテルや観光施設等の設計で活躍中。「ホテル経営とデザイン」をテーマに現在のホテルデザインの世界的流行について、具体的かつ蘊蓄に富んだ解説を頂いた。ホテル建築とは、「美しい女性が差し出すワイングラスに象徴される」ように、建物は美しく快適で内容があり、気持の良いサービスが提供されるべきもの。(社)国際観光施設協会副会長として自主的に取り組

む「観光地評価ワーキンググループ」の活動と、観光地の更なる活性化に向けて、「白骨温泉のケーススタディ」の報告がされた。加えて、古くからのヨットマンとして葉山ヨットクラブの活動などの紹介され、その行動力と建築家としての社会やクライアントに対するサービス精神に感服した。



4 近年の都市開発事情

ゲスト：角田修一氏

UDP 都市再開発企画代表
2011 年 2 月 24 日

清水建設で建築企画営業という、川上段階から官・産・学を巻き込む大規模プロジェクトの掘り起こしを行う手法の先駆者である本人から話を伺った。特に、幕張開発では公有水面埋め立て事業から始まり、民間5社で研究会を設け、氏が世話役を務めた。最初のメッセ建設から業務、商業、ベイタウン開発に続く開発と営業の物語は本音と裏話も交えて興味深いものであった。メッセというわが国初めてのコンセプトを実施するために、知事・行政側との調整、デベロッパーへの協力要請等を行い、最終的に工事の受注に繋がっていった。その過程はゼネコンにとって新たなビジネスモ

TDA 監事 横川 昇二



上：タオルミーナ・ギリシャ劇場
下：アグリジェント・神殿の谷



デルを構築に繋がった。加えて、都市開発に関わる国内外の動向について、具体的な経済データから、今後の可能性や厳しい状況も解説された。

5 昨今の木材市場動向

ゲスト：田口慎二氏

物林(株) 公共建築物 木材利用支援プロジェクトチーム チームリーダー
2011 年 3 月 10 日

昨年10月に施行された木材利用促進法は、今後、低層の公共建築物は原則全て木造化を図るという、これまでの国の方針を180度転換するものである。このことは意外とプロの世界でも知られていない。国の成長戦略の一環として、国産材自給率向上を目指すものであるが、各自治体の抱える不安や課題は大きい。国内木材流通の最大ネットワークをもつ物林(株)は、新事業として設計事務所や自治体等の関係機関の連携をつくるプラットフォームの設立を目指している。TDAとしても大変興味があり、また協力できるビジネスでもある。今後、是



非、協働して開拓して行きたい分野である。

6 東日本大震災の復興

ゲスト：高野公男氏

マヌ都市建築研究所 所長
2011 年 4 月 28 日

年初より、高野さんから都市防災の話を聞こうという企画を立てていたところ、何と東日本大震災が起きてしまった。第二の敗戦というべき現実を前に、まちづくりの専門家として、また専門家集団として何ができるのかが問われる。まずは、会員間での情報を共有化し、復興に向けての意見、提案を自由に議論しようという趣旨でサロンを開催し、下記の11名の参加を得た。東北芸術工科大学の名誉教授である高野さんから、今回の被災についてその背景となった東北地方の諸事情を解説して頂いた。また、現地から戻ったばかりの近田玲子氏からの報告も交えて、これからの都市の照明、空調のあり方から土地利用・都市インフラ、ライフスタイルなど広範囲について熱い議論が交わされた。今回の大震災は超広域的で、原子力災害も含む複合的な災害となった。今後、様々な復興支援の活動が立ち上がるであろうが、当機構としても各方面と情報共有し、出来る限りの支援に参加していきたい。なお、本号の「景観コラム」で関連特集を行っているのでご覧ください。

(出席者：土田、曾根、高野、近田、遠藤、山内、鈴木、杉山、稲田、八木、高橋)

はじめに

編集委員会

私たち NPO 法人・景観デザイン支援機構（TDA-J）は今回の東日本大震災で、被災された方々、犠牲になられた多くの方々に深い哀悼の気持ちとともに、被災者の一刻も早い日常生活への復帰を会員一同お祈り申し上げます。

しかしながら、私どもは悲しみや無念の思いのみで日々を過ごすのではなく、今まで景観を形成に携わってきた専門家の職能的責務として、この震災に関していかなることを感じたか、また、この震災復興計画にどのような考えを持つかを、会員諸氏に問いかけをしました。4月28日には被災地を訪れた人達の報告も兼ねて「TDA サロン」（談話会）もありました。

これらを「景観コラム」にまとめることで、少しでも復興活動へのエールになることを願って、ここに景観文化13号を発行いたします。

パリで大震災を知る

土田 旭：(株)都市環境研究所 会長

○パリで大震災を知る

私はパリで大震災を知った。旅程をほぼ消化し明日は帰国という日に、マレー地区の下町を歩いていると気品のある老婦人に「日本の方ですか」と声をかけられた。日本の友人に電話をかけているのだが通じない。TVでは日本の大地震を報じているとのこと。まさかと思ったが、しばらくして別人も同じような応答をする。ホテルに戻ってTVをつけると真っ黒な津波が三陸海岸全体に押し寄せているではないか。いずれにせよ明朝早く帰らねばならぬ。12日に成田着。途中目にする新聞、週刊誌は被害状況について大きな記事を載せており、家に着くとTVが同じ画像を流していた。幸いわが家の被害はゼロといってよく、次の日事務所に出るとここでもそんなに大騒ぎをするほどではなかったようだ。「やはり事務所にもTVが必要だ」というのが皆の結論だ。

○東北からの情報がない

震災直後から、東北大の建築・都市計画あるいは宮城大から何か情報があると思ったが今回それがなかった。阪神・淡路のときには上海から客人があり来日中の大震災で、新神戸駅のホテルで客人と接触したが、被災者が煤まみれでホテルに押しかけたので驚いたのを覚えている。また、長岡震災では造形大と技科大に連絡をとることは容易にできた。その後造形大の防災の専門家平井さんには随分世話になったが、伊

藤滋さんが平井さんを当大学に送り込んだ理由も解らないでもない。今回の震災でも何人かの友人・知人がいたが連絡が十分でない。これは大学とかコンサル仲間の情報より都市環境デザイン会議のような団体で情報ネットワークを広げるべきだろう。今回の大学や協会を通じてのネットワークづくりはほぼ一ヶ月遅れとなり十分機能しているとは言い難い。

○地震力と津波の力

今回の震災ではその後にくる津波がかくも強力かと感じることになった。とくに津波の圧力は、押す波、引く波で壊滅的打撃を与える。地震による家屋の破損や倒壊などは姿形が見えるだけまだましだ。TVでも現地での感想も同様である。二ヶ月たっても大型・重量ゴミは分別すらできず、復興への手がかりもなかなかつかめない。土木技術が拵えた防波堤、突堤などのもろさにも失望した。堤がコンクリート板の張りボテで中身は土あるいは砂であり、基礎すらないというのは施工技術か、津波の力が想定外だったのか。今のところ誰からもその種の発言を聞かない。道路に付随するガードレールや電柱などでも同様のことが言える。



岩泉町：防波堤のアンコ部分は砂・土。これではすぐ壊れる



田野畑村：瓦礫を片づけた中に三陸鉄道のモニュメント

○東北の加工素材と木材

今回の東北での混乱は産業連関の広がりも露呈した。東北地方には多くの高度技術もった工場があり製品の流通が壊れると納入が一ヶ月、二ヶ月と遅れてしまうのだ。鋼板の加工、アルミサッシュ、陶器など仮設住宅のためのパーツも同じである。非木材のパネルなどは貧相な姿をさらけ出すことになる。当地は木材が豊富なはずだが材木の調達やその加工は出来ないのか。不燃とまではいわないが、難燃加工をした木製品は住み手に暖かみを感じさせる素材であるのに…。これを契機に各地域地域のもつ優れた資源、資材を広めることも復興の足がかりになると思われる。

○安部君推薦の本

震災から数日後、TDA メンバーの安部君が文庫本を抱え

ていて、合計三冊を薦められた。高嶋哲夫さんの「東京大洪水」「TUNAMI」「M8」である。高嶋さんは日本原子力研究所研究員を経て作家になった方で、学識や経験を生かした小説でリアルな展開であった。とりあえず前記の三作が今度の災害や現実の地震予知と似通っているからいろいろと示唆を与えられる本である。

Resilience-「いなし」の知恵

安部 貞司：(株)日本設計

5月11日で、震災から正味二ヶ月を迎える。仮設住宅も少しずつ供用されている。復興プランの提案もわれわれコンサルタントがいくつか受け持つことになった。これからがようやく実効性のある計画づくり、町づくりの始まりである。規則一本槍でなく、知恵やアイデアを豊かに、自然景観・まちの景観をより優れたものにし、後世に伝えたい。

□ 人も、まちも消えた □

国内観測史上最大ともいわれる M9.0 を記録した「3・11」の東日本大震災と原発事故の惨状を報ずるテレビ画面は衝撃的でした。翌朝の映像も、途方もなく巨大な波が海辺の町を食い、泥水にのまれた街は皮肉なほど静かで何一つ動かない、所々で不気味に炎が上がっている悲劇的なものでした。「爪痕をみると、空襲で破壊され尽くされた66年前の光景と重なる」と表現した人がいました。あまりにも広域で深刻な二次的災害も起き、大きな災害に圧倒されつつ、まだ被害の全体像の詳細が詳らかになっていないが、被災地域も2ヶ月が経過して前向きに進む方向に少しずつ変化し、復興に向けた動き、生活再建への取り組みも始まってきたようです。

近代の日本は多くの大津波や戦災を経験してきました、戦後に起きた主な地震・津波は、20をこえる。今回の東北・関東を襲った地震、津波、火災等による大震災は、土木・建築や都市づくりに関わる人達に限らずあらゆる専門家に与えた衝撃は大きい、夫々が出来ることを模索している日々です。人工物の無力さを、大自然の脅威の前に人間はいかに小さな存在であるかをおもいしらされました。

震災をしっかりと受け止めて今後の都市づくり・復興計画に生かす必要がある。安全なまちづくり、防災や減災、免災、さらにエネルギー問題、電力供給システムの脆弱さに対して何が足らなかったのか、その時を経験した私達が震災から何を感じ、何を考えることが出来るか、次代の人たちに残しておかなければならない。

□ 長期展望しながら一步一步 □

戦後65年を過ぎ、経済効率優先の中で心の豊かさや日本人が持っていた文化力を見失ってきたのではないかと問われ

てきました。明治時代にラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、自然の美しさとともに、日本人の家族や地域での愛情の深さに心打たれたと、日本民族を賞賛しています。日本は山、森林や海、川など美しい自然環境に恵まれ、自然と共生しながら生きるという文化を持っていました。被災した三陸は特に美しい自然の残る地方です、今回の大震災ではその美しい自然と景観や多くの社会資本が失われた、経済効率や費用対効果以上に日本の文化や美しさとはつながらなかった結果といえる。インフラの復旧は、早期の復興の基礎であることは言うまでもないが、復興のため安全確保の名の下に、不要不急の土木工事で自然をますます壊さないことが重要と考える。美しい地方の再生が求められている。

高台に仮設住宅を建設する計画が進んでいる、将来も安全で安心な町にするためには、住宅の高台移転や港の集約化で経済効率を上げる案が現実的だと思うが、急いで高台に仮設住宅ではなく恒久的市街地としたい。仮設の住宅とまちづくり、仮設住宅のあり方も改善しなければならない。永く住める住宅、その間のコミュニティの維持・育てることが求められる。地元気仙大工による木造仮設住宅(岩手・住田町)やオークヴィレッジ社(飛騨・高山市)の永住を前提とした木造仮設住宅などの先駆的な多くの試みがある。早く本来の姿を示し、未来に希望が持て地域にそくしたまちづくりにしたい。その地域に何が必要か、必要でないことは何かを検証し、長期展望をしながら一步一步進み、高度成長型・集約的均質でない国づくりが求められる。いずれにしても、大規模な造成工事によって一挙に巨大な平場を造成するようなことは避けるべきである。



木造仮設住宅・合掌の家(オークヴィレッジ木造建築研究所)

□ 日本が変わる日 □

今なお13万人が避難生活の状態です、3万人が亡くなり行方不明の未曾有の困難な中です、福島では、原発災害という重大な出来事は今なお進行中で先の見えない予断を許さない状況となっています。まだまだ長期的になりそうだ。

今回は、東京も震度5強に直撃された、電力を除けば数日で機関機能は回復したものの東京が直下型地震に襲われたらどうなるか、南海、東南海、東海、富士山噴火が連動する超大型地震も近づいているといわれるが、M10の地震が発生

しない保証は無い、その準備もまだ出来ていない。

『天災は忘れた頃にやってくるという先人の教訓も忘れてはならない』。

執筆中に二つの大きなニュースが入って来た。「テロ組織アルカイダ指導者のオサマ・ビンラディン容疑者殺害」、「浜岡原発の全面停止へ」である。9・11 はテロとの戦い、3・11 は文明と自然との闘いと言える、共に世界が変わる日となった。

ただ今回の震災は、耐震技術はもとより非常時にパニックも暴動も起きない規律正しさ、民衆の意識と民意の高さが賞賛され海外メディアに紹介された、災害を受けた日本と日本の力をあらためて海外に示すことになりました。立たされた状況での日本人の連帯意識、小さな絆や人を思いやり、助け合う心が発揮されたといえる。私の住んでいる、武蔵国の国府、東京・府中市では毎年5月の連休中は大国魂神社の例大祭「くらやみ祭」が行なわれる。その神社は北向きのめずらしい本殿配置です、北方擁護（奥州擁護）のための性格をもつと云われる（源威集による）。東北地方の復興を願って祈願しています。

景観形成再考の時

井上 洋司：(株)背景計画研究所

3.11 大震災の後、計画停電が東京を襲った時、私は何故かスペインのマドリードの中心街で下宿をしていた頃の事を思い出した。

下宿はビルの4階にあったが、昼間も薄暗く、太陽の街・マドリードのイメージとはかけ離れていた。夜も室内照明はさほど明るくなく、部屋までの内部階段の照明は、ある一定の時間で切れるもので、駆け足であがっても間にあわなかった。そんなある時、なぜそんなに暗いかと、下宿のおばさんに聞いたことがあった。

彼女いわく、“都市に生活する人は、広場で人との会話を楽しみ、夜は外にでて、観劇やらバルで過ごし都市生活を楽しむのだから、家はそんなに明るい必要はないの。むしろ夜、華やかな街に繰り出す事は都市生活者の特権よ！私も主人が生きている頃は良く街に繰り出していたのよ”と得意げに語られた記憶がある。

確かに夜間はもちろん昼間も、都市の美しさを引き立たせる工夫があちこちにあり、その楽しみを享受できる環境が整っていた。街路は個々の建築に過剰に配慮するのではなく、都市のあり方に重きが置かれていた。それ故、道や広場の性格もわかりやすく、それに見合う整備がされていた。つまり、都市に対する価値観の秩序が明確にあった。これはこ

れで、スペインという場所と国民性を表す街の基準を垣間みた気がした。



プラザ・コロン（マドリード）に設けられた美術館と水幕で覆われたそのアプローチ通路の夜景

翻って今、節電のお陰で明るすぎないコンビニや、デパートは大歓迎だけど、それだけでない何かを、この震災は私達に啓示していると思う。

1970年代末に建築史家・伊藤ていじが日本の嘗ての主要生産物「米」をキーワードに「ライス・サイクル」なる小論文を書いた。その中で「主食である米が如何に日本の文化を形成してきたか」、さらに日本の景観が、「米」と如何に強い関係で出来上がっているかを説いた。

しかし戦後持ち込まれた蛍光灯のまぶしい光は、民主主義思想と同期して、「陰影礼賛」に代表される上記のような文化認識を置き去りにした。

だが今、私たちは火山国、地震国での都市のあり方を問われている。今後、私達は従来の価値観とは全く異なる住まい方、生活の仕方を求められる筈で、その意味では地球と共存する最も優れた都市景観の創造を迫られているともいえる。津波で、薙ぎ倒された町並みの向こうに見える異様に美しい自然の地形が、私たちにその創造的再生の大きなヒントを与えてくれていると思った。全く新しい文化の結実としてのその都市景観の先頭には間違いなく今回の被災地が立つ事になると思うし、私たちはそれを支援すべきであると考えている。

東日本大震災に思う

伊丹 勝：(株)日本設計 会長

今から43年前、大震災時における東京江東デルタ内の避難広場確保を目的とした防災拠点再開発計画に参画の機会を得たことが、今の私の原点でした。その時の大地震への逼迫感は「69年周期説」で説明され、「あと〇年でその周期に入るから時間が無い」が共通認識となっていました。今年はすでにその周期に入って30年くらいが経ち、大地震は必ず来ると来ていない……が私の頭のどこかにあった筈です。

30年くらい前から地震発生メカニズムの説明が明快になり、プレートテクトニクスにより、「プレート型」とか「直下型」と言われるようになりましたが、私にもよく納得でき

るものでした。

そして今回の巨大地震は、日本列島をとりまく四つのプレートのうち二つの境界が 500 キロメートルの長さにわたって動いたということで解説されており、「やはりプレートテクトニクスは正しかった」が私の第一の思いです。

この思いはたいへんに根源的でありまして、それは、「地震国日本」は世界で類例のない四つのプレートのせめぎ合いの上に形成されていることを全ての基点にしていかなければならないとの感覚から来ています。

「想定外」という説明が叩かれています。たしかに、明治以降でも大津波を伴った大地震は、1896 年の明治三陸沖地震、1933 年の昭和三陸沖地震があり、今回に匹敵する高さの津波が来て、やはり多くの方が亡くなっています。私はまだ不勉強ですが、その時の経験から高台に再復興させた地区と、高台でなければならないと思いながらもなし崩し的に守られなかった地区があって、それが今回の被害に如実に現れたようです。

東日本大地震の規模は観測史上四番目とか 1000 年に一回とかの解説がありますが、被害の実態としては 50 ～ 100 年に一度は起こっているわけで、プレートテクトニクスに裏付けられた緊迫感の認識が一般的に成りえていなかった社会構造、精神構造が問われるのではないのでしょうか。

このように、地球のごく自然な地殻活動であるプレートテクトニクスと正面から向き合わざるを得ないところに日本列島が立地しているということが改めて解ってしまったということが根源的感覚ですが、その感覚は原子力発電所の事故にも繋がってきます。

核分裂を連鎖させて、その発生する熱により水蒸気を作ってタービンを回して発電するという原理は単純で判りやすいのですが、核分裂を人工的に起こして、それが安定して継続するようなコントロールを絶対に続けていかないといけないというシステムに根源的不安を感じます。東京電力の社長の謝罪に対して、ある女性が「原発を早く止めてください」と詰め寄るテレビ画面がありましたが、この「(始めたものは)止められる」という摂理を逸脱しているのが、原子力発電のように思えます。あらゆる人工的活動は、メインスイッチを切ればその瞬間に完全終了してしまうようになっているのが根源ではないのでしょうか。

震災復興計画

遠藤 勝勲：遠藤勝勲建築設計室

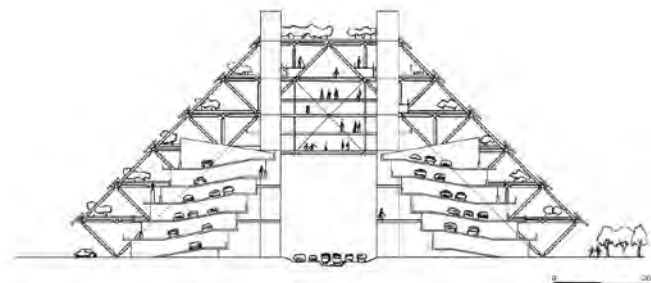
世界に誇る防波堤もほとんど役に立たず、被災地に残された膨大な瓦礫の整理には相当の時間が掛かると予測出来、そ

れと並行して早期の復興が必要と考えます。

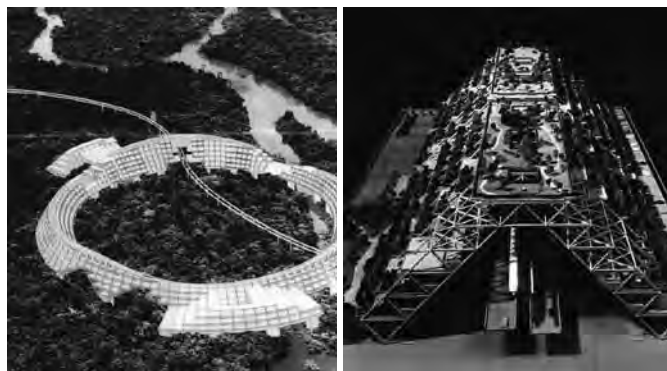
そこで私に提案があります。菊竹清訓建築設計事務所では 1970 年より層構造モジュールの提案をして来ました。それを紹介すると、

『土地を人工的に立体的につくることは、機械産業技術で可能である。土地を大量、急速、長期にわたって、ニーズに対応して供給するには、それなりの基本的理念が求められよう。まず人工土地の構造は、トータルとして人工の丘という安定した多孔質で自然的な構造をめざすべきである。そして構成は、解体組み立てのできる量産部材にして人工土地を更新、増改築ができるシステムをもったものにしておくこと。そのうえで人工土地を個別利用部分と、公的利用のインフラ部分に分け、インフラストラクチャーには上下水道、電気、通信、交通、パーキング、公園、学校、文化施設などの都市設備を包含収容することとする。人工土地は、自然の土地と同様、環境としての景観、眺望、日当たり、通風、水はけ、などの基本的条件をみたまものでなければならない。人工土地は根本的には、居住環境としてすぐれていることが不可欠である。そのうえでオフィス、ショッピングなどにも転用が可能なるものであることが望ましい。』

(『内は菊竹清訓作品集 3 日本型住宅 九龍堂抜粋)



ここに提案した層構造モジュールは復旧に時間の掛かる防波堤の建設を待つ前に住居の早急な復興が重要であり、防波堤が未完であっても層構造モジュールで造られた人工土地は早期に供給でき地震、津波に対し安全と考えられる。



復興は、土地区画線に縛られない運用から

小澤 尚：宮城大学事業構想学部教授

宮城大学入学試験前日、3・11の日に揺れる中を机下で、「もし震源地が東京付近であれば大変」と家族に携帯電話でコールを試みたが通じない。大きな揺れが治まり、明日の試験が実施できるか学内を確認していた頃に、震源地や津波の大きさの情報が入り、実施は先送りとなった。そして、在学生や知人達の安否を心配や確認しながら、数日間学内に寝袋で待機した。一段落して5月開校までの短時間の中、海沿い等の現場を視察し、一方予定されていたオランダ訪問では草の根的な震災復興義援アート・音楽イベントの参加や、米国の被災地域の復興事例への視察なども行った。体験とともに様々な怒りと無力感、想いも巡らせた。その中でこれからの地域の再生や他地域で起こりうる災害の対策の糸口として大事な取り組みは、土地の境界線に縛られない運用ではないかと再確認している。今まで紀要や雑誌に載せた考え方もあるが、それぞれ地権者の持分面積比率に応じながらも、土地境界区分線に縛られない、共同体としての合理的運用と共同出資による地区や街区単位の再生だ。まず、それぞれの財産が瓦礫として散在している初期の状況を解決するにしても、その敷地境界線の形態に縛られない運用を進めることが必要だ。例えば、当面どこに瓦礫を積み上げて、どこに避難可能な高さや性能を持つ建物をつくる用地を確保するとかといった決定も土地運用に対する合意形成が不可欠であり、その支援とともに、概ね合意がとれた段階で、実行と補完といった自治体等の動きが求められる。既に、目前の瓦礫をめぐって、堤防や台地への再利用案といった物処理の珍案も聞かれるが、地面等の権利の調整や解決のないままでは、それらはノイズに過ぎず解決を遅らせることも心配だ。復興が遅れた例として、6年前のカトリナの水害後の復興が進まず問題を抱えたまま時が過ぎているニューオリンズのローワー・ナインズ・ワード地区や、2001年9.11事件跡地復興の方向や遅れ状況なども見てきたが、位置や境界線単位に縛られる



ローワー・ナインズ・ワード地区の放置状況の例(2011.4)

復興や再生は、形態は違っているものの従前の延長になってしまう。更に結局立ち遅れや放置、格差や差別、不満を招き、学校や市役所も高いフェンスで防御せざるを得ない状況も見られた。そうならないように、まずは従前の土地区画線に縛られない運用への着手が鍵となろう。

東北のこれからを思う

粕谷 正則：粕谷ランドスケープ設計事務所

あの震災+αから2ヶ月が経過した。私の縁のある会津の高原では雪が融け、フキノトウやコゴミを味わう季節となり、若松の町は桜も終わりに近づいた。そんな高原の村に今、原発の被災者が大挙入村している。避難地域から住まいと仕事を取り上げられ、帰宅できる可能性の少ない、体をもてあました人達だ。何もすることのない人達が毎日ぶらぶらしているのは、少し不気味。これからの山菜の季節、採取禁止と強くも言い難い状態で、どうなるか心配、トラブルに発展しないことを祈るばかりです。民宿主催でバーベキュー大会など開き、元からの村人も対応に苦慮している。

今回の震災からの復興を考えるに当たり、福島を外して考えるのが妥当だろう。なぜなら、福島の被災地は、死に地となり30年ぐらいいは入植不能であろう。たとえ入植が出来たとしても、原爆の被爆者並みに扱われ周りからは対等に扱われることは無くなるでしょう。

仙台地域の復興に当たっては、その全てを「伊達の心意気」を引き継いだ、仙台人に任せたい。日本政府も業界筋も東京人も、口を出すべきではない。金を出したり、法律を修正したりするなどの、後方支援に徹するべきである。仙台地域に生まれ育ち、この地域で学び仕事をこなし、20年30年後も土地に根付いている、建築家や都市計画化にやってもらおう。傍から見て、幼稚なデザインでも良いではないか。土地の伝統材料や、伝統の空間構成が、守られている町並みの復興を期待したい。ミニ東京に成りかけていた仙台の町を、リセットする機会ですぞ。

三陸海岸などの漁業地域の復興。この土地に住むに当たって、①命が一番大切 ②日々の仕事はやり易い環境で ③三陸特有の美しい景観を残す ④都会生活と同等の利便性の確保 この4原則決めれば答えは出るのでしょうか。津波のこない高さに、基幹道路、安全な位置の居住区、使い易い漁港とバックヤード、海からの景観を損なわない土地造成、光ケーブルや、60サイクル200ボルト化など、先進のインフラ。

平地が少なく土地造成が難しいとの話も聞こえてきますが、津波から河口の橋梁が残ったように、津波の力は下を通過させる人工地盤なども考えられます。

再び、福島でのこと、岩手の被災地に物資運びのボランティアから帰ってきた村人の話。被災地のおばあちゃんから「ありがとう、どこから来たねん、福島？ あんた等の所はもっと大変だねー」と言われましたとのこと。さすが東北人は強い。

アートの被災

工藤 安代：NPO 法人 アート&ソサイエティ研究センター代表

〔アートによる被災者支援についての現状報告〕

東日本大震災の被災者への支援活動が美術関係者の間でも広がっている。東京を含めた東日本を中心として、アート界の人びとによる支援への取り組みは、意外な程早かったといえるだろう。アーティストやキュレーター、アートディレクターといったアート関係者らが集会を開き、未曾有の災害において被災した人びとに対して自分たちになにができるのか？ アートの役割とはいったい何なのか？ 語り合うイベントが震災後1カ月の内に開催された。ここにいくつかの活動について報告したい。

『震災チャリティ・アートアクション ―いま、わたしになにができるのか？― 3331から考える』 2011年4月2日(土)、3日(日) <http://www.3331.jp/schedule/000896.html>

「大災害の中、思考を止めず動くことをやめず、一日も早い復興のためアクションを起こしてゆきたい」という思いを共有するアーティストが集まり、秋葉原（東京）を拠点とするアート施設「3331 アーツヨダ」にてチャリティ・アートイベントが開催された。総勢80名を超えるアーティストたちが参加し、作品やアートグッズの即売、ワークショップやトーク、ライブ・パフォーマンスなどが行われ、集められた義捐金393,018円は全額が日本赤十字社に寄付された。

『Art for LIFE』 2001年3月26日～ <http://a41.jp>

被災者へのアートによる支援活動を一覧できるウェブサイト『Art for LIFE』が、建畠哲（京都市立芸術大学学長）、南条史生（森美術館館長）、長谷川祐子（東京現代美術館）らにより立ち上げられた。このサイトに、アートによる支援活動情報をだれもが自由に登録できる仕組みになっている。現在全国でさまざまな組織や個人による活動が立ちあがっているが、お互い何をしているのか、どこへコンタクトをとったらいいいのかといった課題に対処したものだといえる。自分たちの支援活動を広報したい主催者側にとっても、支援を受け入れたい被災者側にとっても情報が共有できる便利なサイトだ。

震災後、まだ15日目の3月26日には『Art for LIFE』の立ち上げと共に、アートができることについて考えるシンポジウムや、チャリティー・アートセールが六本木ヒルズで行

われた。主催側の発表によると600名近い参加者が集まり、総額¥663,859（アート作品セール¥383,000、アートTシャツ販売¥80,000、募金箱¥200,859 ※カフェ売上からの寄付を含む）の義援金が集まったという。

§

また、なにかアクションを起こしたいと考えるアーティスト個人の活動も目立ってきている。ここでは代表的なものを2つ程あげてみたい。

『ハートマーク♥ビューイング』 アーティスト：日比野克彦 <http://heartmarkviewing.jp/>

被災地をだれもが「愛」や「気持ち」「ころ」をイメージする形である“ハートマーク”を避難所の被災者に送ろうというプロジェクトが、震災後1週間も経たない段階で開始された。全国各地の人びとが心に抱いている「何かできないか」という思いを“ハートマーク”という形で具現化し、それを被災地に届けることで、肉体的にも精神的にもつらい思いをしている避難者たちを励まそうという思いがプロジェクトの目的だという。すでに京都や大阪などの関西圏や愛知、神奈川、東京などでもワークショップが開催された。詳しい様子はウェブサイト<<http://heartmarkviewing.jp/>>で見ることができる。



〔ハートマークのつくり方〕

1. どんな布でも良いので、ハートの形を縫い付ける（またはボンドで張る）。
2. ハートの大きさは自由（ただし正方形）。
3. 複数のハートマークをパッチワーク的につなげる。
4. つながったハートマークを避難所に送り、避難所の壁面に飾り付ける。
5. 時に現地で被災した人々とワークショップをしてハートマークを一緒に作る。

※ウェブサイトからハートマークを作るこの解説がダウンロードできる。

『Daylily Art Circus（ディリリー・アート・サーカス）』 アーティスト：開発好明 <http://daylily-art-circus-2011.blogspot.com/>

『ディリリー・アート・サーカス』のロゴ付き特製トラックにアート作品を詰め込み、日本列島を横断しながらチャリティー展を行なうというプロジェクトが一人のアーティストの発案ではじまった。展覧会の収益金を全て被災地に寄付し、最終的に被災地域会場で被災者達に無料で楽しんでもらおうとする展覧会だ。アーティストの開発氏はこのプロジェクトを通して、被災地域だけでなく日本全体が再生していくためにアートによる心の繋がりを運びたいと語っている。前半の時期を関西、関東を回り、9月以降に被災地域に向かう予定だという。



関西地域から市役所、美術館などの駐車場を間借りして行なうチャリティー展。展覧会の入場料は募金として日本赤十字社を通じ被災地に届けられる。また現地で必要な物資を寄付してもらいながらトラックに詰め込み、被災地の15カ所の会場に届ける予定だという。作品は子供達を楽しめるようなものを選定し、あたかも昔サーカスが町にやってきたような、ドキドキする驚きを運んでいこうという意気込みだ。(※イラストはウェブサイトより)

震災から時が経つにつれ、日常生活に必要な救済物資が届き、生きていく上での衣食住の確保は進んでいる。しかし、避難所での生活が長期化すればするほど精神的にも厳しい状況になっていく。そのような状況に対し、アートにできることはなにか？ この問いを真摯に考え、模索をはじめているのが今の美術界の姿だといえる。まちづくりや地域活性化に一役買うことで重宝されるアート・プロジェクトが全国的に急増したこの10年。今後はこれまで以上に社会の問題に関わり、人びとの命と向き合い、多様な価値観を見つめ直すことが求められる、次の段階へと向かってるのではないだろうか。

被災地を訪れて

佐藤 芳治：NPO 法人 都市デザインワークス理事

この度、津波の被災地に行ってみりました。

震災から二ヶ月を経てようやく道路は瓦礫の撤去が進み、電柱の設置が進んでいたところでしたが、民地には瓦礫が残り残った建物に絡みついた残骸は被災時のままでした。

今回訪問した宮城県石巻市、南三陸町志津川、気仙沼市と湾の形は違いますが、いずれも小高い山と海が近接する美しい港町です。それぞれ相当な被害ですが、地理的条件により状況が異なっておりました。

石巻市は海岸線と平行に立つRC造の建物が防波堤の役目をし、その後ろの比較的新しい住宅は残っていました。



石巻市

南三陸町はリアス式海岸で津波が増幅され壊滅的でした。一部破壊された堤防の隙間では市街地からアイレベルで穏やかな美しく海を見ることができました。



南三陸町志津川

気仙沼は火災により辺り一面焦げ茶色の瓦礫に大型船が陸に乗り上げています。中心市街地の建物は一部、残っているのですが建替えを要する被害も多数でした。(いずれも高台から撮影した写真です。)



気仙沼市

どこも大幅な市街地の組み換えが必要と実感してきましたが、港町の良さや景観を守りながら、地盤レベルの設定、津波堤防の作り方、住宅の高台移転などを行うための道のりはまだまだ遠いとも感じました。まちづくりの大きな方向性やビジョンを具体的な素案としてなるべく早く提示し、その後はそれぞれの地区の住民の復興の歩みとともにじっくりと練り上げていく、そのような手法が必要となると感じました。

色の力 色の記憶

杉山 朗子：(株)日本カラーデザイン研究所

東京にいてテレビやネットが伝えてくれる画面でしかわかりませんが、この大震災は地形も変わるほどの大きな被害を引き起こし、被災地の方々は生まれ育ったところの景色をすべて失ってしまい、被災された方々の思いは如何ばかりかとお察しするばかりでした。

景色を失うことは、色を失うということなんだと実感します。色を失うという言葉は、一般的には「驚きや恐れで顔色が青くなる。意外な事態にどうして良いか分からなくなる。」と定義されていますが、突き詰めると命を失うに通じるのだと感じます。

色彩計画などを生業にしている、このような際には何もお

役に立てず、まったく無力だと痛感する一方で、なくなってしまった色を探したい思いが募りました。今はすっかり何も見えない状況の中、古くからあった色を思い出す縁はないものかと思っていました。

そんな毎日の中で、石巻や気仙沼の漁師さんたちががれきの中から見つけた大漁旗を洗って、その鮮やかな色をはためかせているニュースを見て、やっぱり生活の中で育んできたものは無くならないと教えられました。その旗は、大漁の誇らしさと豊漁の充実感を、港で待っている人たちに遠くからも伝わるようにと、力強い色をしています。嬉しさを沖から伝えてきた旗が本来の役割に戻れることを願うばかりです。



気仙沼市本吉町大谷（上田幸一撮影
asahi.com より）

色には力があると感じます。やはり色を大切にすることは意味あることだと改めて考えました。

その土地土地の記憶を持ち続けるために、地形やまちの構造などの記録だけでなく、それぞれの土地の思い出の色や音や、光景などを語ってもらう記憶のデータベースを作成できればと思いました。画像で集めるのはなかなか難しいでしょうが、思い出などを文章でつづってもらうという形式であれば、どこでもだれでも参加できるでしょう。なにも派手な色についてだけでなく、松原の緑や、海の色など日常にあった色のこと、船が出ていく音のように生活の中にあった音などを集めたらどうかと考えています。

余計なことといわれそうですし、今はまだ、思いだすと失くした悲しみや辛さを感じるかも知れませんが、語る場ができるのも意味あることだろうと感じます。年齢に関係なく、どんな土地であったかを言葉にしてもらい、蓄積しておいて、なにか再建の際には役立つこともあるのではないかと思います。観光や仕事等で訪れたことのある人も参加できるような皆でわいわい楽しく残せるデータベースの考えかたを広めていきたいと思っています。TDA でもやっていければいいと思っています。

原発にどこまで頼るか

曾根 幸一：環境設計研究室
芝浦工業大学名誉教授

東電と政府の関係が明らかになりつつある。もともと国営

であったものを10の会社に分割したのは、吉田茂を支えた白州次郎の話に出てくるから電力会社には政治が深く絡んでいるのだろう。天下りや政治献金は当然のことであったのかも知れない。時代が変わったのだからいい加減して欲しいが保証責任の検討では東電、政府、と金融機関まで登場して一足飛びに電気料金の値上げ論までである。国民が負担するのは当然だが、問題は被災者への救援を急ぐことだ。

報道によれば、この数年世界的に原発を増やす「原子力リネッサンス」を迎えようとしていたのだという。しかし今回の「フクシマ第一」以後原子力発電のチェックを始めた。わが国は電力の24%を原子力に頼るがフランスでは71%だ。サルコジ大統領は原発推進派らしく早くもわが国を訪れて40年前のフクシマ原発とはものが違うと強調したらしい。ワインで有名なローヌ地方にも原発はあって心配する農民も少なくないという。これに対してドイツの原発依存度はわが国と変わらないが、自然エネルギーを11.8%も開発している。電気エネルギーが生活水準をそのまま示すことにはならないが、総電力（GWh）を人口で割ってみると、アメリカが1,737kw（単位は不詳）とダントツでフランス、日本、ドイツ、ロシア、韓国、イギリスは1,000～700程度だ。中国の総電力は多いが人口がわが国の10倍あるから、今後を考えると中国が3倍、インドが6倍程度増やさないと先進国入り出来ない勘定だ。

イタリアは国民投票で「否」電力の一部をフランスから買っていると言う。どこの国でも6～70%は水力発電の比率をもつことを私は初めて知ったが、フランスだけは11.2%と異常にすくない。資源に恵まれず山も少ないせいかな？ 石化燃料が地球温暖化に与える影響がかまびすしい。わが国の自然エネルギーは未だ2.8%にとどまるから、今後は10%程度までにすべく舵が切られるだろう。しかし地球規模で言えば現在2%程度の原発にとどまる中国やインドの方が遙かに大きい問題だ。インドや韓国は原発を規定計画通り増やす模様だが中国にはトーンダウンの兆しがある。電気エネルギーは送りにくい、溜めにくいという欠点がある。馬鹿でかい冷蔵庫をもつアメリカ人のライフスタイルも考え直すべきだが、仮にアメリカ・アジア・ヨーロッパの相互送電や蓄電技術が進歩すれば夏の昼のピークカットは解消し各国は発電能力をそんなに増やさなくとも済むはずだが、そんな技術はエコ・カー止まりかしら？ 節電で街が暗くなっている。夏のくそ暑い日にクーラーのないのは閉口するが、今のままでいい施設だって沢山ある。電力を使え使えと言って来たのが国策だとすればとんでもない話である。

東西の道、海上の道

高谷 時彦：(株)設計計画高谷時彦事務所
東北公益文化大学大学院教授

山形県鶴岡市の大学に関係しているため鶴岡の状況を報告する。結論から言うと、鶴岡を含む庄内地方は殆ど被災を免れた。

3月11日、夕方の飛行機で鶴岡に入る予定であった。地震後、東京は大混乱、こちらからはどこにも電話ができない。しかし、鶴岡の大学から携帯に電話が来て、庄内空港は機能しているので明日はどうしますかという質問。平穏な別世界からの声であった。

結局鶴岡入りは18日となった。庄内空港についてみるとやたらに人が多い。自衛隊の大型ヘリコプターもいる。数日後には救援部隊らしき若い外国人たちも空港で見かけるようになる。被害を受けなかった庄内空港を中継拠点として、仙台方面、東西方向に人や物資が展開している模様。同じ東北にあっても日本海側の庄内鶴岡はむしろ支援する側に回っていたのだ。

太平洋側の仙台と日本海側の鶴岡は高速道路で強く結ばれている。高速バスに乗ると日本海と太平洋の近さに驚く。地震と津波で縦方向の動脈はズタズタに切断されてしまったが、奥羽山脈を東西に越える道は、しっかりと機能している。ほかにもこのような東西のルートが重要な働きをしているはずだ。日頃私たちは関東（更に古くは畿内）中心に縦のルートで東北を捉えてしまう。しかし、歴史的に見ると南北方向の山脈、山地に直行する東西の道こそこの地域の文化や産業にとって重要であった。そんな歴史的な地域構造が奇しくも浮かび上がってきているのである。

また、海をつなぐルートが歴史的に果たしてきた役割にも再び光を当てたい。西回り廻船、東回り廻船などが思い起こされる。復興において、南北の大動脈だけでなく、東西方向あるいは海上ルートでの人・もの・情報の流動が重要であることに気づく。東北地域の将来のあり方を考えるうえでも、示唆に富むのではないだろうか。

さて、私たちが関わった、小名浜港（かつての東回り廻船の港でもある）のプロムナードはどうなったのか。残念ながら基本設計のみで終わったが、出来たものは私たちが描いた図面に近い。やはり気になっていた。訪れてみると護岸構造物自体が破壊されている。近くにある魚市場の前も瓦礫の



被災前後の小名浜港プロムナード

山。臨海部の工場も閉鎖されている。海岸散策どころではなく、まずは生活の再建に奔走している毎日であろう。そこに放射能の問題が重くのしかかっているのが FUKUSHIMA の今である。

東北の震災復興計画に向けて

高野 公男：(株)マヌ都市建築研究所所長
東北芸術工科大学名誉教授
元国土審議会東北開発促進特別委員会委員

私は、長らく東北の大学で教鞭をとっていたことから、被災された知人・縁者も少なくなく、今回の震災では辛い時間を共有しています。三陸沿岸から石巻、松島、塩竈にかけての海岸線は美しく、また農漁村の生業の風景には魅了されるものがありました。その東北らしい風景が一瞬にして壊滅してしまったことが痛ましく、何と表現したらいいのか言葉が見つかりません。私は長年、防災まちづくりをやっておりますが、これほどに巨大な津波災害を予想した専門家が殆どいなかったことが残念で、またわれわれ専門家の非力を情けなく思っています。

○稲むらの火

3月11日の翌朝、福井県大野市に住まれる長年の知己、野田佳江さんというご高齢の女性から電話がかかってきました。「東北は大変なことになっているようだが、先生の所は大丈夫だったか」と私の安否を気遣ってくれました。そして、「私たちが戦前、小学校で習った『稲むらの火』の物語はどうなったのでしょうか。あの教訓をしっかりと守ってさえいればあんなに大勢人が亡くならずに済んだのではないのでしょうか」。私は、専門家として返す言葉もなく、教訓が風化している現状を伝えるだけでした。しかし、全く風化してしまっていたわけではありません。津波の専門家や災害情報学の専門家は警鐘を鳴らしていました。奥尻島の津波災害を調査した畏友、故廣井脩教授（東大）が「津波避難は時間が勝負、なりふり構わずとにかく逃げろ」と強調されていた言葉を思い起こします。また、津波の恐ろしさや逃げることの大事さを絵本や紙芝居、人形劇などで子どもたちに教えていた人たちも少なからずいました。先年のスマトラ沖地震津波災害では、静岡県の子供グループが演ずる『稲むらの火』の人形劇が国際的に注目を浴び、このストーリーは日本でも再び評価されるようになりました。しかし、時はすでに遅し。『稲むらの火』の知恵は、広く社会に浸透するまでには至っていませんでした。いま、復興計画が始まっていますが、近代技術だけに頼らず、自然の脅威と闘った先人達の知恵や歴史の教訓から学ぶことも大切だと思います。

○被災地支援に参加しよう

ガレキ処理、避難所支援、被災地調査など、ボランティア

で被災地を訪れ、現地の人たちと交流する人たちが増えていきます。被災して大変な思いをしている人たちに何か手助けをしてあげたい。そう思うのは日本人同胞の多くの人々の思いではないでしょうか。海外からも様々な支援の手がさしのべられています。助け合いの精神は世界共通だと思います。日本は災害列島です。いつ何処で大きな自然災害に出会うかわかりません。ことに若い世代の人たちに現地体験をして欲しい。災害体験の共有化は日本の災害文化・生活文化の基礎におかれるべきものだと思うからです。

○復興計画と東北の心

私は東北各地のまちづくりのお手伝いをやってきましたが、そこで学んだことは「東北の心」というものがあるということです。東北の地方の小都市に住む人たちは、オホーツク海から吹く<やませ>など過酷な自然条件と闘い、土地を拓き、まちをつくり、独自の生活世界を構築してきました。先祖から引き継いだ資産や暮らしの知恵を守り、農地や海、まちを守ってきた人たちなのです。そこには自負があり、誇りがあり、そして意地があります。まちの復興、生活の再建はこうした住民・市民の誇りと意地から出発するのではないのでしょうか。復興計画は何よりも住民が主体となり知恵を出し合い、力を寄せ合って進めるべきものと考えます。



復興のシンボルになりうるか。一本だけ残った景勝地・高田松原の松の木（陸前高田市・筆者撮す）

○復興計画のあり方

いま、政府機関や専門家たちが様々な復興計画の構想を提示しています。住宅を高台に造ることや被災した低地の安全な土地利用、津波避難ビル、産業の振興、雇用の促進策など、ハード、ソフトのいろいろな青写真が提示されています。専門家の構想力や政府の実行力が試されているのです。やがて、地域の立地条件、被災の状況に応じてメニューは選択され、復興事業として具体化されていくでしょう。この場合、復興計画はいうまでもなくトップダウンで強権的に進められるのではなく、自治体を中心となり、地域の住民と協議して合意のもとに進められるものでなければなりません。住民の要望や発意を尊重し、多くの課題を総合的に調整し、長期的展望の上に立った復興計画が求められるのです。この場合、情熱と見識を持った地域のリーダーと住民活動を支援する専門技術とまちづくりの経験をもった都市計画家の参加が欠かせません。地域固有の特性を踏まえ、円滑で効果的な組織体

制をつくっていくことが復興計画推進の鍵となるのです。

○復興計画支援センター

復興計画を推進するためには、基地となる常設・専用の集会施設・情報拠点が必要です。その一つのイメージとして、ワークショップなど会議の出来るスペースを保有し、そこには図面や模型等の展示物、情報器財、復興計画の様々な資料などが置かれ、専従のスタッフやボランティアが常駐し、誰もが気軽に立ち寄れ、情報交換や談話の出来るサロン、バザーなど簡単なイベントが出来る広場…などが想定されます。このような施設が設置、運営されることによって復興計画は円滑かつスピーディーに進むと考えます。ことに公民館など住民の集会施設を失った被災地ではこのような基地の設営が緊急に求められているのではないのでしょうか。微力ながら私も老体にむち打って復興支援の一兵卒として現地に通っております。東北の新しい未来の構築を目指し、東北人の粘り強さを信じて頑張りたいと思っております。

「復興」ではなく

高見 公雄：法政大学デザイン工学部
(株)日本都市総合研究所

あまりに広域かつ凄惨な被災であり、被災地は中小都市が多く、もとよりインフラ等が強い地域ではないことから、救援・救護に携わる人以外は、被災地にどう近寄ったら良いのか分からず困っていた人も多いのではないかと思います。私も震災直後より、所属する日本都市計画学会により、復興特別委員会の立ち上げ、先遣隊による被災地状況の報告などに接して来たが、まちづくりや市街地整備の専門家として、いつ、どう動くべきか迷っていた。

幸いにして、4月末に同学会メンバーによる調査団が組まれることとなり、3泊4日の行程で松島町から宮古市田老地区まで現地に入ることができた。テレビでみる光景が目の前に広がっており、最初半日位は強い衝撃をうけたものの、次第に感覚はマヒしていく。2日目、3日目と延々と続く被災地の惨状は馴れというか、あきらめに近いものとなる。報道はいろいろされているが、こんなところまで浪がきたのかという現実、この場所に再び住まおうとする人はいないのではないかと思った。

驚くのは浪の高さである。女川町の病院はかなりの高台にあるが、その1階が冠水した跡を見て、この湾全体がこの高さになったかと思うと全く信じがたい。もうひとつは被災地の広さである。小型バスで走り続けて数100kmにわたり惨状が続く。もとより人口減少などに悩む地域であり、全く無くなってしまった市街地の再興は物理的にはあまりに障害が少ない。不謹慎省みず言うなら、白紙に絵を描くような新た



左上の病院の1階
が津波で被災した
(女川町)

なまちづくりが可能になるだろう。

当初よりは少し戻ってしまっただが、東京のまちはあの日以来街路灯や看板照明が消え、静かで美しい。全く余計な原発事故の追加により、大震災の復興なのか原発事故対策なのか錯綜しているが、東京が災害の直接的な影響を受けていることは重要なことである。被災地においては、これからの人口構成、暮らしに応じた新しいまちが造られていくものと期待する。そういった中、東京を始め日本全体もこの災害を機会に「元に戻る」のではなく次の時代への対応を考えていくべきだと思う。

現在の暗い東京のまちに示唆される新しい暮らし、それは物理的、金銭的に豊かではないかもしれないが、人々が安らかに暮らせるまちや環境ではないかと思う。「復興」という言葉よりさらに前向きな適切な言葉が見つからないが探している。

JIS 照度基準の見直し

近田 玲子：照明デザイナー

福島第一原発の事故による節電対策として一番に実施されたのは、照明を消すことであり、石油ショック以来のライトダウンの社会実験ともなった。昼間、電車やホームの照明が消されていても特に支障がないのを知り、これまでの大きなムダに改めて気づかされた人も多かったと思う。

経産省から平成 23 年 4 月 14 日付けで「JIS 照度基準」の形式改正の通達が出された。震災による止むを得ない緊急節電対策として、照度表記に幅を持たせた上で、現行の照度の約 2/3 にあたる下限値を採用することで全ての照度を一段階下げるというものだ。屋外空間では、住宅地周辺は 3 ルクスから 2 ルクスに、歩行者専用道は 5 ルクスから 3 ルクスに、40km/h の車両交通道路は 20 ルクスから 15 ルクスとなる。夜の都心では明るさを落としたらかえって雰囲気が悪くなったとの感想も多かったが、屋内空間では間引き消灯で憂鬱な空間になってしまった所もある。

天井蛍光灯を全て消し、LED スタンドに替えて 90% の省エネを計画している企業が増えていると聞くと、手元が明る

くても天井や壁が暗いため視覚的なストレスが生まれることは容易に想像できる。

そこで提案したいのは JIS 照度基準の見直しである。全体を明るくする「平均照度」に替えて、必要な場所の明るさと周りの明るさのバランスを考える屋外作業場の照明基準にある「作業領域と周囲領域の照度との関係 (JIS Z 9126 4.3.3)」を屋内設計基準にも採用するのである。例えば事務所は、これまでは部屋全体を 500 ~ 750 ルクスで設計していたが、「作業領域と周囲領域の照度との関係」を基準として考えると、スタンドで手元の明るさは 750 ルクス、部屋全体は 100 ルクスとなり、高い省エネ効果と同時に、快適な空間を創ることが出来る。

表 作業領域と周囲領域の照度との関係

単位: lx

作業領域の維持照度, $\bar{E}_m$	周囲領域の照度
≥ 500	100
300	75
200	50
150	30
50, 75, 100	20
< 50	規定しない

「震災による緊急節電対策」の長期化が予想される現在、高い省エネ効果を実現するためには、光源の選択、点灯回路設計、まぶしさの無い照明器具、昼光利用、昼光連動での点滅制御、を基本とした上で、働く人の心の健康を保つ照明環境の快適性を確保することを考えた、大胆な照度基準の転換が求められる。



宮古市

落ち着きのある夜間景観づくりの提言

八木 健一：八木造形研究室

このたびの大震災に関しては表現する言葉が見つからないまま、とりあえず個人的にできるだけ募金をした。

かつて私が関わった仕事のうち、仙台近郊にある「みちのく公園ふるさと村」の移築民家がどうなったか心配だったが、屋根の茅が一部欠落した程度で建物自体にはあまり損害

がなかったと聞いて案心した。

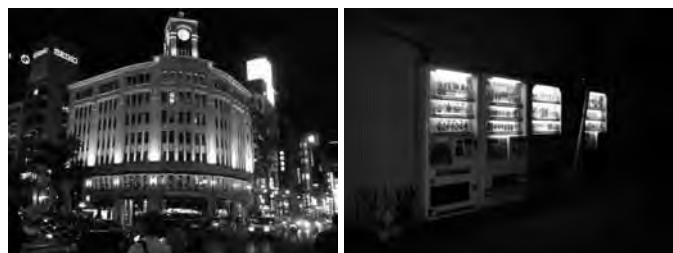
それより、私が1985～87年に設計を担当した新浦安駅前広場が地盤の液状化で甚大な被害を受けたことにショックを受けている。私の専門は基本的には地表のデザインを扱うランドスケープデザインであり、基盤の埋め立てや造成工事にまで責任を負わされることはないが、あれほど見事にぶち壊されると、空しいというか、もう完全に負けましたという気になってしまう。

これからの被災地復興に関して私に何が出来るだろうかと考えてもあまり具体的なアイディアは浮かばないが、日常的な節電は間接的な協力として誰でもできることだと思う。

マスコミも連日節電を訴えており、これから夏に向けて電力消費量を押さえる為の様々な留意点を上げている。ただ、あまりにも感情的に節電意識を煽りすぎるのも問題である。とにかく電気を使うなどというのではなく、必要なものと不要なものを冷静に区分しなければならない。例えば、駅のエスカレーターなども止めているところが多いが、そもそもバリアフリーの一環として設置したものを動かさないというのは、本来の趣旨に反するのではないか。

これまで日本の都市の夜景、特に繁華街は昼間のように明るかった。屋外広告物や各種自動販売機などから放たれる煌々とした光はあまりにも度を超していた。震災後は夜間の街がかなり暗くなっているが、すこし慣れてくると何となくヨーロッパの街並みを連想できるような落ち着いた感じがするというのは私だけではないようだ。

この機会にTDAの立場として、控えめで落ち着いた夜間景観づくりに関する提言をしてはどうだろうか。まさに「消去法のデザイン論」を展開するチャンスだと思う。



景色の時間

吉田 慎悟：色彩計画家

3月11日の地震後、地下鉄も走っていないことを知り、自宅に帰ることをあきらめて東日本橋の会社でずっとテレビを見ていた。津波に多くの自動車が流され、家々は水に襲われ、仙台空港は孤立していた。その映像はパニック映画のように凄まじく、しかし何故か実感がなかった。テレビの周りでは食糧を買い込んで、酒を飲み始めた人達もいた。時間を

追う毎に映像は次々と新しい被害を伝えていたが、それは私の想像を超えていて何処か空虚なものだった。その後は、毎日、原発の報道が続いた。放射能が東京を襲うかもしれないという危機感があり、テレビ報道を注視した。しかしそれでもテレビを通して見る画像は、映画を見ているような頼りないものだった。

災害の実際はどのようなものだったのだろうか。そのことを少しでも確かめようと4月末に仙台に向った。白石インターチェンジを出て東に向かい、海辺を目指した。ある地点を境に状況が一変する。津波に襲われた荒浜あたりは、何もなく荒涼とした景色だった。海岸線に沿って北上すると、その景色がずっと続く。仙台空港は営業を再開していたが、津波の爪痕は痛々しかった。次の日は東松島に向かった。昔、子供たちと遊んだ野蒜海岸の松林はかろうじて残されていたが、木造の住宅は押し流され、残された土台のコンクリートだけが海水で洗われて、妙にきれいだった。動かなくなった自動車も無残な姿で散乱したままだ。テレビでは津波の力がどれほどのものか実感できなかったが、コンクリート柱が根元から薙ぎ倒され、鋼管柱も引きちぎられて倒れている様に自然の力のすごさを思い知る。

これから震災復興住宅が急いで建設されるだろう。まずは安全に過ごせる場を確保することが大切で、これからつくるまち並みをどのような色彩にするかなどということは、真面目に議論する時間はないかもしれない。しかし、これからつくるまちが永続的に育っていくことを阻害しないような色彩の基本的なあり方だけは知っておいたほうが良い。景色はすぐには復興できない。地域の個性ある景色の再生には多くの時間を費やすだろう。時間とお金がないことを理由に、その場しのぎの安っぽい色が並ぶまちにはして欲しくない。地域の地形に添い、気候・風土に合わせ、コミュニティのまとまりを感じる美しいまちの景色を再建して欲しい。そのために色も重要である。

